

(二)

武田ミキ先生の思い出

杉原 黎子

昨秋頂いた美樹会の会報で、ミキ先生が体調を崩して入院され、現在は退院・ご静養中とのこと、また、学長職はご令息学千先生に引き継がれたことを知り、ミキ先生のご容態を案じる一方で、学園経営のご心労から解放されてまたご健康を回復されるであろうとも思っていた。一度お見舞いに伺いたいと思いつながら、一日延ばしにしているうちに、悲報に接する結果になってしまい、残念でならない。

一、大学人としてともに生きて

可部女子短期大学にお世話になったのは、昭和三十九年から四年間という短い期間であったが、その後今日に至るまでの私の長い教師生活の基礎を築かせて頂いたのは、この武田学園であり、その師はミキ学長であったと言っても過言ではない。学長は、就職前から多くの方から厳しいお方と伺っていたので、直接お話しするには随分と緊張したが、次第に、筋の通ることならお聞き頂けることが分かってきた。しかし、若気の至りという言葉で片づける

には余りに失礼なことも幾度か申し上げ、今思い出しても冷や汗の出る思いであるが、ミキ学長にまつわる思い出の中から、二、三述べさせて頂く。

ある時、学生の成績が余りに悪いので、多数の不合格者を出し、追試をしたことがある。何かの機会に、学長にそのことを話し、学生にもっと厳しくしなければと申し上げたら、

「大学で習ったそのままのノートを使って講義をして、学生に分かるはずがない。」

とお叱りを受けた。今になって考えると、学生の成績不振を責める前に、自らの教授法を反省しなさいとおっしゃりたかったのであろうと思うが、生意気盛りの私は、

「不十分なところはあります、私も一生懸命準備して講義しているつもりです。学長先生、私の講義をご覧下さってぜひご指導下さい。」

と申し上げた。学長は

「分かりました、そうしましょう。」

とおっしゃってその場は終わりとなったが、その後学長が私の講義をご覧下さったかどうかは、知る由もない。よくぞ恥知らずなことを申し上げたものである。

また、ある日、学長からちよつと来てほしいとの呼び出しを受けた。何うと、二枚の染色の作品を前に、これで「染色学」の単位を認定してやるわけにはいかないかとのこと。当時「染色学」という必須の講義があつて、その担当の非常勤講師が非常に単位認定に厳しい方で、学生の脅威的になっていたことは私も知っていた。察するに、その単位が取得できなかったために中退となっていた人が、卒業証書が必要になって、学長に頼みに来、学生思い

一、大学人としてともに生きて

の学長には断りきれなかつたのであろう。私は、「染色実習」は担当しているが「染色学」は持つておらず、したがつて当然私にはその単位を認定する資格はないと考え、学長にその旨申し上げ、さらに

「学長先生は被服科の主任教授でもいらつしやるのですから、先生がご判断なさつたらいかがですか。」
とつけ加えた。学長は

「分かりました。そうしましょう。」

と言われただけであつた。この時のことは今も時折思い出し、私はあれで良かったのだらうかと考えることがある。それにしても、学長の一存で何とでもできたであらうに、どうして私ごととき若輩にあのようなことをおつしやつたのか、今となつてはお聞きすることもできない。多分、学長は独断を避けたがためにご相談下さつたのであらうと思うが、あのご返事で間違つていなかったと言う自信は、全くない。

就職して何年か経つた年の秋、私の担任に生活の乱れが気になる学生がいた。彼女は親元から離れて下宿生活しており、何度も呼んで注意したが、改まる様子はない。そこで、学長と相談して、親に大学へ来て頂くことにした。来学の日が決まり、学長もしくははしかるべき先生がお話し下さるものとばかり思つてお願いに行くと、

「あなた会つて話をしなさい。」

とのこと。両親は、呼び出した本人が余りに若く頼りなげであつたためか、最初は大学の姿勢や私の指導に対する不満を述べておられたが、次第にことの重大さを理解され、しばらくの間彼女を手もとに引き取られることに落ち着いた。このことを報告に行くと、学長は

「それで結構です。ご苦労さまでした。若いあなたには荷の重い仕事とは思いましたが、勉強をして頂くと思ひ

まして……」

と言われたちよつと間違えば大学の信頼にかかわり、私学にとって最も大事な学生募集にも影響することであるのに、よくぞ任せて下さったものと、そのご配慮に感謝したことであった。

よく、武田ミキ先生は生涯教育者であったと言われる。先生は、ご自分の学園の学生・生徒のみならず、若い教師をも、こうしていつの間にか教育しておられたことを思い、改めて敬意と感謝とを捧げるものである。先生、本当にありがとうございます。